

「障害という個性を越えて」

氷見市立北部中学校 一年

山田美希
やま だ みつ き

「どうして神様は障害というものを与えたのだろう。」

ふと心の片隅で言ってしまう。この世界では、生まれつき障害をもった人がたくさんいることを初めて知りました。発達障害や聴覚障害など、私の知らない障害はたくさんあることを本で見つけました。この作文を読んでくださる方もこんな体感はないですか？例えば、いつも歩いている道には黄色いでこぼこしたタイルが並べてあったり、大きなショッピングモールの他目的トイレのウォシュレットにはつぶつぶとした点があるのを見たことはありませんか？実はこれらは全て、障害を持った人が快適に過ごすためにつくられたものなのです。私はどうして、このような物があるのか、どうしたらもっと障害を持った人々が快適にすごすことができるのか、私が思う理想の未来についての思いをこの作文で伝えていけたら良いと思います。

「どうしたらもっと快適に障害をもった人達が暮らすこと

ができるだろうか。」改めて考えてみると難しい事です。今の時代はどこにでもバリアフリーで聴覚障害や視覚障害に適した完備が整っています。私達の知らない所で技術は進化しています。しかしもっともつと居心地の良い世界を自分達の手で創るためにどうすれば良いか。そんな私にある言葉が入ってきました。

「車椅子で、一番嫌だったのは、周りの視線ですね。」その瞬間、私は理解しました。どんなに良い製品をつくっても、一人一人が互いを理解し尊重しないとなんの意味もないということにどうして気付かなかったのでしょうか。こたえは簡単、私自身が一人一人を理解しようとしていなかったからです。クラスの中でも、「私とあの子は合わない。」という理由で自ら距離を置いたり、陰口をその人のいない所でたいてはいないでしょうか。このクラスをよくある光景が、人種差別や、障害を持った人を非難するきっかけをつくって

るのだと私は考えます。私もし障害をもっていたら、「私だ
って好きで障害をもっているわけじゃない。」と心の中で叫ん
でいると思います。例えば、ダウン症という障害をあなたが
持っていて、町中を歩いていて、

「あの子障害者だ。かわいそう。」

って言われたらどうします。きっと私だったら偏見に嫌気が
さし、部屋にとじこもったり最悪死を選ぶかもしれません。
こんな環境を私達が創っているのです。またある日突然、交
通事故で、足やうで、目を失ったらどうしますか。障害はあ
る日突然、私達の身に襲いかかるのです。「私は障害者じゃな
いし。」そう言っていると、それは立派な人種差別になってい
ます。同じ人間・日本人なのにどうしてこんなに、人は人を
馬鹿にしないと気が済まないのでしょうか。そんな障害を持
っている人にどうして偏見の目を世間は向けているのでしょ
うか。

最後に、「神様はどうして障害というものを与えたのだろう」
という疑問に私は、神様はきつとその人にたくましく生きて
ほしいのだと思います。私は過去に補聴器をつけていた女の
子と出会いました。女の子はにこにこことくたくなく笑い接
してくれました。私は障害とは、悪いものではないと思いま
す。「障害」はその人の個性だと思います。なぜこう思うかと

いうと、障害はその人にとって大きな壁を壊すための武器で
もあり、この先どんなに辛いことがあっても乗り越えられる
からです。私達は「障害」という言葉にとらわれすぎだと思
います。障害など気にせず、みんなが社会に貢献するのが、
「心の輪」を広げる大きなきっかけだと思います。この世界
が「障害者」という偏見の言葉がなくなればいい、これが私
の思いであり、一つの願望でもあります。